

**平成 21 年度 博士前期課程学位論文要旨**

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

**高度認知症者に対する作業療法実践内容とその臨床的判断過程**

～作業療法士の語りと実践場面の観察から～

学位の種類： 修士（作業療法学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学系

学修番号 08896601

氏名：植田 恵美子

（指導教員名：小林 法一）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

**I. はじめに**

高齢社会となったわが国において、今後アルツハイマー型認知症（以下、AD）を呈する高齢者がさらに増加すると予測されている。このような状況に対し、認知症対策が急速にすすめられている。作業療法（以下OT）においてもADに対する対応が進められているが、高度アルツハイマー型認知症者（以下、高度AD者）については、軽度や中等度AD者に比べ効果研究はもとより事例報告も少なく、根拠に基づく臨床実践を難しくしている。特に笑顔が見られず話しかけに反応しないような高度ADのクライアントに対しては、どのような視点で目標を立て、どんな介入プログラムを計画するか、その臨床的判断に悩むことが多い。

そこで今回、高度AD者に対するOTのクリニカルリーズニング研究として、実際に臨床現場で行われているOTの内容とそのサービスの提供に至るまでのプロセスを明らかにしたいと考えた。

**II. 対象者および方法**

対象は高度AD者にOTサービスを提供している作業療法士（以下、OTR）であり、臨床場面の観察と半構造的インタビューを実施した。そこで得られたOTRの語りデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。

**III. 結果**

分析から生成された概念は 35 個、カテゴリーは 8 個となり、概念・カテゴリーの相互の関係性を表すため結果図を作成した。

その結果OTRは反応の得られないような高度AD者を目の前にしたとき、「どうしていいかわからない」といった《迷いや悩み》をもつ。そこで最初に〈医学的視点を基に〉第1期《心身機能面にアプローチ》を行うことを判断する。その関わりを行いながら「（高度AD者は）どう感じているのか」、「心の通い合いは出来ないか」と考え、〈反応の出やすい・出にくい状態を把握しようとする。これを第2期《基本状態の確認》とした。OTRはその結果を利用して、第3期《人との交流を促したり、快時間を提供》しようという判断を行う。その経緯の中でOTRは、適宜《家族・他職種との情報交換、環境の調整》を実施する。高度AD者に対するOTRの判断過程は、時間的な経過を追って、おおよそこのような経緯を辿ることが分かった。